

Oshima
Letter

大島レター

8

March
2020



表紙のお話

大島の北側には、山をぐるっと一周できる散策路「相愛の道」があります。1933年、入所していた青年団の奉仕作業によって開拓された全長約1.5キロの道では、多くの入所者が歩いた想い出の道でもあります。しかし、ここ10年の間は、台風等で東側の山が崩れ、シダ類が生い茂り、歩くことができませんでした。2019年、瀬戸内国際芸術祭のアーティスト鴻池朋子さんによって再び整備されました。会期中は何千人もお客さんが歩いたため、今は道がしっかりと固められています。季節や時間、天気が変われば、植物、虫や鳥、聞こえる音なども変わります。大島の豊かな自然を感じ、道から見える瀬戸内海の美しい風景を眺めていると穏やかな気持ちになりますね。入所者のみなさんがどのような気持ちで歩いていたのか、いつも考えながら歩いています。

(写真…白神基広)





目次

高松市の取り組みについて

3

〈寄稿文〉

大島青松園との交流を振り返って

真鍋武紀(前香川県知事)

5

〈連載コーナー〉

瀬戸内放送局 今月の「大島アワー」

8

〈最近の活動報告〉

紅白歌合戦 in 大島

9

編集後記

高松市の 取り組みについて

大島は、高松港から東方約8キロメートルに位置する島で、その大部分を国立療養所大島青松園が占めています。現在、大島には、大島青松園の入所者や職員など、関係者のみが居住している状況であり、このうち、入所者については、2020年2月1日時点で50人、平均年齢は84・6歳となり、居住者は減少の一途をたどっています。

一方で、1996年のらい予防法の廃止後は、ハンセン病療養所の歴史などの人権学習や、瀬戸内国際芸術祭による島外の人との交流が盛んになっています。

高松市では、大島の総合的な将来



Miyawaki Shintaro



ビジョンとして、大島振興方策を2014年11月に策定し、「入所者の意向の尊重」「国有資産の有効活用」「有人島としての存続」「大島の特性を生かした振興」を基本方針として、大島の振興に取り組みむこととしています。

同方策では、「歴史の伝承」「交流・定住の促進」の2つの方向性を定め、それぞれに対して具体的な施策42項目を掲げ、ハンセン病に対する正しい理解のための人権学習や現地学習会の開催、瀬戸内国際芸術祭を通じて島外との交流や芸術家の創作活動の場の提供など、より多くの方に大



Miyawaki Shintaro

島を知ってもらおうための取組を推進しています。

掲げる施策のうち、策定後3年以内に事業着手し、5年以内の完了を目指すものが20事業、長期的な検討を要するものが7事業あります。

これまで、子どもが大島に宿泊し、アーティストや入所者との交流を深める「子どもサマーキャンプ」の開催、1950年代後半の大島の様子を再現する「大島ジオラマ制作プロジェクト 大島の昔の暮らしを聞こうワークショップ」、参加者が島内を巡って見つけた風景の写真や、昔の大島の写真を掲載した「大島のマップをつくらうワークショップ」、今年度は「紅白歌合戦 in 大島」(詳しくはP9をご覧ください)の開催などにより、歴史伝承、文化振興、交流促進を図るとともに、大島の情報ツールとしてこの大島レター



Oike Tsubasa

を年2回発行しております。

昨年開催されました、瀬戸内国際芸術祭2019では、大島に12877人の過去最高の来場者があり、本市が実施している事業との相乗効果により、島内外の交流がなお一層促進されました。

また、入所者及び来島者の安全を確保するため、喫緊の課題である老朽化した大島港の改修について、国や関係団体との協議も進めているところ です。

今後引き続き大島青松園入所者自治会と共に、大島の振興に取り組んでまいります。



大島青松園との交流を振り返って

真鍋武紀（前香川県知事）

大島青松園は、1909年ハンセン病の療養所として設立されました。私が初めてこの園を訪れたのは、1999年4月創立90周年記念式典に出席するためでした。当時は、1996年に「らい予防法」が廃止され、島外との行き来が自由となり、大島青松園を取り巻く状況が大きく変化する時代でした。1998年に提起された「らい予防法」違憲国家賠償請求訴訟について、2001年原告である療養者の全面勝訴の判決が下され、国側は控訴せずこの判決が確定しました。これを受けて、総理大臣と厚生労働大臣が謝罪し、国は新たに補償する法律を作り、入所者や社会復帰者の名誉回復、社会復帰支援及びハンセン病問



題の啓発活動等に取り組むことになりました。このような動きの中で大島青松園でも外部との交流が次第に活発となっていきます。

毎年、6月25日を含む週の日曜日から土曜日までの「ハンセン病を正しく理解する週間」に合わせ知事としてほぼ毎年この島を訪れました。船が着くと多くの入所者の方々に迎えていただき、近況報告やお話をするともに、会場に来られない方の部屋を訪問することもありました。納骨堂が出来てからは、そこを訪れお線香をあげてお参りするのですが、納骨堂の中へ入ると、年々亡くなった方のお骨が増え大変悲しく残念でなりません。夏には夏祭りが開催され、私も都合がつけば参加していました。大勢の人が集まり歌に合わせて踊りなども披露されました。帰りの船は満員で大変な混雑だったことを思い出していま

す。

「ハンセン病を正しく理解する週間」、「らい予防法による被害者の名誉回復及び追悼の日」に合わせ、テレビやラジオの放送を通じてハンセン病の啓発活動が行われたほか、県下の高校1年生に「ハンセン病の正しい知識と正しい理解を」と題したパンフレットが、小学5年生を対象にハンセン病の副読本「ハンセン病を知っていますか？」が配付されました。これらの結果、大島青松園を訪れる人の数は年々増えてきたと思います。入所者の方は、長年にわたる文化芸術活動に熱心に取り組んでこられた方が多かったので、書、絵画、写真、陶芸、盆栽、詩作など多岐にわたる作品が啓発パネルとともに香川県庁のギャラリーなどに展示され、多くの県民が鑑賞しました。

さらに、入所者の社会参加支援事業として様々な事業が行われましたが、希望を伺いながら県内各地を訪



問する里帰り事業が毎年度実施されました。折からの讃岐うどんブームもあって大島青松園、長島愛生園、邑久光明園へ出向いて行われた「うどん交流会」が大変好評であったと聞いています。

外部との交流が盛んになってきた大島青松園ですが、亡くなる人が増え入所者の数が減るとともに高齢化が一段と進んできました。

この園の将来をどうするかを巡って様々な議論がなされてきました。そのような時、瀬戸内海の島々を舞台に現代アートの祭典を開催しようとの話が持ち上がりました。瀬戸内海の島々は、日本の高度経済成長の過程で問題に遭遇し負の遺産を抱えながら活力を失ってきました。美しい景観と長い歴史を生かし、現代アートの力で活性化し、島の人々を元気にしようとする構想です。ハンセン病の隔離政策の歴史を持つ大島もこの瀬戸内国際芸術祭の舞台にふ

さわしいと考え、ぜひとも実現しようとして2006年に北川フラムさんがこの島を訪れ、準備が始まりました。北川フラムさんの声掛けにより2007年頃からやさしい美術プロジェクトが定期的に島を訪れ、入所者と交流を深めながら構想をあたため具体化していきました。2010年7月19日スタートの第1回瀬戸内国際芸術祭では、やさしい美術プロジェクトの「つながりの家」が作品として展開されました。ポランティアのこえび隊によるガイドツアー形式で、訪れた人に大島の歴史と作品の説明が行われました。大島の生活、記憶、文化を表示した展示のほか、面会人宿泊所を改装し、島産の野菜や果物を使った料理を、大島の土で焼いた器で提供する「カフェ・シヨル」の店がオープンしました。この店は、来園者、入所者、療養所の職員、アーティスト、ボランティアが気楽に集まる場所となり、芸術

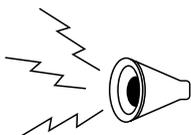


祭閉会後も月に1度の営業が続いているようです。私も、2012年にカフェ・シヨルで行われた「干し柿ワークショップ」に参加しましたが、こえび隊などのボランティアが入所者との信頼関係をしっかりと築き、生き生きと活動している姿を見て大いに感心しました。

大島が瀬戸内国際芸術祭の舞台になったことにより、多くの人が訪れ、島の歴史を学び隔離された人が受けた哀しみ、苦しみを理解する機会となったと思います。大勢の人との交流が進んだことを喜んでいる入所者もおられ、今後もこのプロジェクトを継続する必要があります。しかしながら、私達がこの島の歴史やこの島で暮らしてきた人の生活や記憶を十分理解し、後世に伝えてゆく体制が整っているとは言えず、これを実現するために私達に残された時間は限られているように感じています。

〈連載コーナー〉

瀬戸内放送局 今月の「大島アワー」



大島アワーを始める際、当時

自治会長を務められていた山本隆久さんに相談をしました。盲人の方も楽しめる手作りのラジオ番組を園内で放送したいと伝えると快く受け入れてくださいました。「大島アワー」というタイトルの付けたのは山本さんです。

今回は、紅白歌合戦 in 大島で「瀬戸の花嫁」を歌ってくださった脇林睦子さんにカラオケについてお話を伺いました。

私が子どもの頃は戦後だったため、新しいものはほとんどなく、ノートや白い紙はとても魅力的な時代でした。そのような時代でも声を出すことは何も必要でなかったのでできたんですね。私は6人姉妹でしたから、何か仕事や作業をするときは、姉たちが声を出して歌い始め、それに合わせて一緒に歌っていたことを今でも思い出します。声を出して歌うことは多く、私の生活の一部でもありました。

入所後も、日頃から歌うことはありました。隣の寮の人から「今日は綺麗に歌っていたね」と声をかけてくれたり、強い風に向かって歌ったりすることもありました。若さの至りで平気でやっていましたが、それらも私の単なる楽しみでした。

実は、カラオケの歴史は浅く、7年程前のことです。盲人会の方が積極的に誘ってくれて、職員さんと一緒に歌ったのが初めてのカラオケ大会でした。歌っているとき、ステージの目の前には大きなスクリーンがあり歌詞が流れているのですが、私はハンセン病の後遺症のため歌詞は見えていません。なので、部屋にある拡大鏡で歌詞を確認したり、音源を聞いて毎日歌詞を口ずさんだりしながら、歌詞を覚え込まないといけません。また、最近は音が反響して聴こえるため、職員さんが隣で拍子をとってくれるので歌えています。

歌っていると、子どものとき歌っていた頃の昔の風景が浮かんだり、昔歌っていた歌を思い出したり、楽しい思い出が蘇りますね。

テンポの良い歌や音程の幅の狭い歌を選んで歌っています

©NIK KOTZ



最近の
活動報告

紅白歌合戦

IN

大島

11月下旬。瀬戸内国際芸術祭2019が終了し3週間が経過した頃です。穏やかな日常に戻った大島で「紅白歌合戦in大島」(高松市主催)がありました。

実は歌うことが好きな人所者のみなさん。園の節目の行事ではカラオケ大会が開催されることもあり、大島会館のステージでみなさんが歌っている姿をこれまで何度もお見かけしました。私たちもカラオケ大好き！他の島にもど自慢はたくさんいます！ならば、みんなと一緒に楽しめるステージをと、紅白歌合戦が企画されました。

大島からは紅組・白組合わせて6組が参加しました。また、芸術祭と

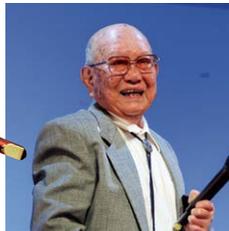


関わりのある、直島の福武財団、豊島、男木島、高見島の応援団さざえ隊、粟島を代表して2019年芸術祭秋会期で活躍した瀬戸内少女歌劇団、こえび隊、高松市役所の担当職員さんも参加しました。照明や音響、舞台美術もプロフェッショナルなスタッフがかけつけて華やかに演出！歌に合わせて照明の色を変えたり、紙吹雪などが散ったり。衣装もバッチリで、車椅子の入所者さんがドレスを着て熱唱です。次々と豪華なステージが繰り広げられ、観客席も大盛り上がりでした。

最後にスペシャルゲストのちくわ笛奏者の住宅正人さんが登場。ちくわにゴーヤに蓮根を取り出し、そつと唇を沿えると、あら不思議きれいな音が出るんです。みんなびつくり。園内の盲導鈴(ハンセン病の後遺症で目の不自由な方が音を聞いて歩くために音楽が流れる装置)から流れる音楽「ふるさと」を演奏する

と、口ずさむ人や手拍子をする人なども居て会場は一体感に包まれました。終了後、「見応えがあった」「今までにない雰囲気でした」「今という声をいただきました。普段なかなか会えない入所さんが来いたのも印象的でした。ちなみに勝者は紅組でした！

瀬戸内の島々は近いようで遠い。目の前に隣の島が見えていても行き来したことがないという島民も大勢いるそうです。ハンセン病の隔離政策の歴史を持つ大島も同じく、この会を機に初めて訪れた方もいました。ステージで歌う姿に観客みんなでエールを送り、帰りは口々に「よかったよー」「あんたうまいなあ」と讚え合う笑顔が忘れられません。この紅白歌合戦は小さな試みではありますが、歌を通して大島が周囲の島と緩やかに繋がっていくことを実感しました。



写真は全て©NIK KOTZ

編集後記

連載コーナー「瀬戸内放送局」

今月の大島アワーで脇林さんの元へ訪れたことと、芸術祭で多くのお客さんが来てくれたことや紅白歌合戦が楽しかったことなどをお話してくれました。特に心に残っている体験は、2019年4月に大島を訪れたノルウェーの名女優リヴ・ウルマンさんとの出会いだと思います。この小さな島で出会えた奇跡にとても感動されました。その日も「元気でいらっしやるかしら？」と遠く離れたリヴさんのことを想っていたとのこと。実は、リヴさんはご自身の帽子を敢えて大島に置いてノルウェーへ帰りました。今度来る時はこの帽子を取りにくるときだそう。近い将来、脇林さんとリヴさんの再会が実現すると思いますね。

大島レター 8 2020年3月1日 発行 高松市
編集協力 国立療養所大島青松園、大島青松園入所者自治会
編集 こねび隊(笹川尚子、甘利彩子、北川フラム)
問い合わせ NPO法人瀬戸内こねびネットワーク 〒760-0019 香川県高松市サンポート1-1
TEL 087-813-1741 FAX 087-813-1742 info@koebi.jp www.koebi.jp